閨秀画家　武村耕靄女史

勝部真長

昨年十一月、お茶の水女子大学附属幼稚園の創立百周年の式典を挙げた前後、ＮＨＫや民放でも、この幼稚園百年記念にちなんで、幼児教育の歴史を顧みる番組をいくつか放映していた。その中にＮＨＫが朝の番組に坂元彦太郎先生の解説で『幼稚保育の図』を紹介した。この図は武村耕靄（こうあい）女史が明治二十三年にその頃の東京女子高等師範学校附属幼稚園の保育状況を描いたもので、その頃の日展に出品し、間もなく高松宮家にお買上げになり、宮家に秘蔵されていたものを、戦後、宮家から女高師にお下げ渡しになり、女高師の図書館の書庫に秘蔵されて今日に至ったものである。今回特に例外としてＮＨＫに貸し出し、全国の視聴者の眼に触れたものである。この縦四尺七寸五分、横一尺八寸五分の絹本着色の構図は四段からなり、一段は童話を聞かせている処、第二段はフレーベル式の恩物遊び、第三段はオルガンを弾いての唱歌、第四段は戸外の自由遊びから成っている。これは明治前半の保育の内容を示すものと見られる。なおこれと同じ図柄の下絵が附属幼稚園には秘蔵されている。また、園長室の壁に掛けてある『お茶の水風景』は、明治初年のお茶の水の堀割の田舎びた自然を描いて、遠く富士山が見える図柄で、これも耕靄女史の筆に成る。

そもそも耕靄女史とは誰か。誰もその人となりを知る者が私の身近にはいなかった。ところがＮＨＫのテレビをみて、耕靄女史の血筋の者と名乗るお方が園長室に電話をかけて来て下さった。それが何と仁杉とよさんである。旧姓石川とよさんは私の家内のお茶の水の附属の同級生であり、その御主人の仁杉巌氏は私の府立四中での同級生である。石川とよさんの叔母に当たられる幸子さん（石川倉次氏四女）が耕靄女史の養子となった武村忠氏の妻である。

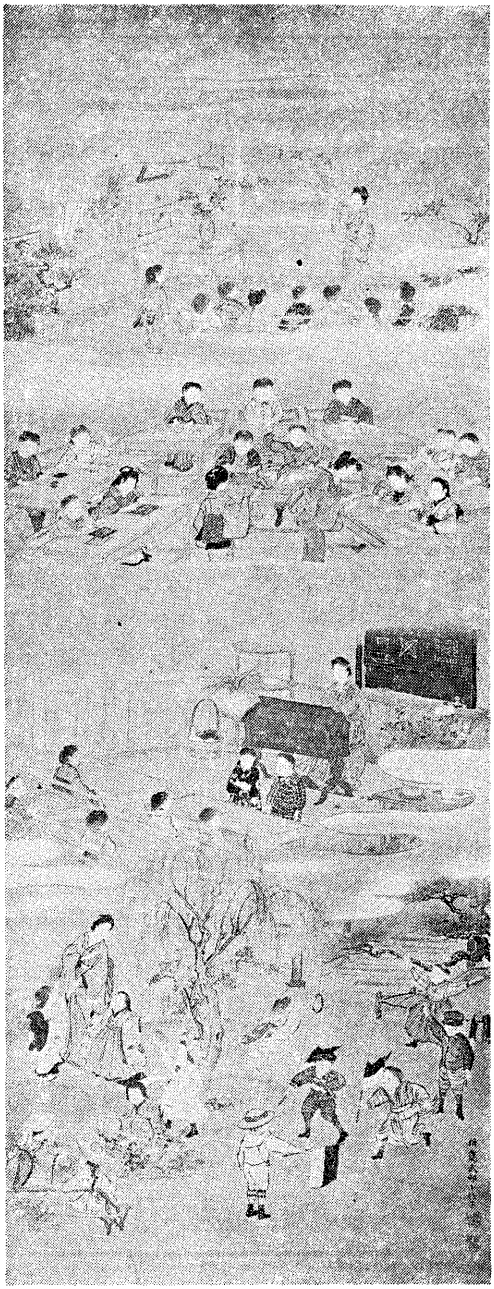
耕靄女史は本名を千佐子といい、仙台藩士武村仁左衛門の長女として嘉永五年（一八五二）十一月二十五日、江戸芝口三丁目の仙台藩邸で生まれた。母は留勢（松永氏）である。この母は彼女が六歳の時に亡くなったが、松永貞徳の血筋を受けて、和歌、

書、絵をよくし、千佐子も幼時から母の影響で書、和歌、絵をたしなんだ。父の仁左衛門は武村家の五代目で、明治維新となって禄を失い、それに病身であったので、女ながらも千佐子がその細腕でくらしをたててきた。狩野探逸、山本琴石、春木南溟等から学んだ日本画の技術をいかして、輸出用の扇面などを描いたという。そして、その暇に、横浜共立女学校に通い、また米人タムソン夫人について英会話を学び、明治八年、工部省の助教兼通弁となった。明治九年、東京女子師範学校の英語の教師となり、明治十二年、アメリカの前大統領グラント将軍夫妻が来日して、明治天皇と会見した時、グラント夫人の通訳をつとめたというから、彼女の語学力は相当なものであったわけである。この頃、我が国洋画の先駆者川上冬崖について西洋画の技法を学んだという。女子師範学校では英学教授手伝いとして勤めたのであるが、やがて絵画の授業をも受持つことになり、それもはじめは洋画を中心に教えたという。彼女が自ら木板刷りで作った図画教科書に『依様帖』『女子画帖』『小学女子画帖』など数十冊あるが、これは東京馬喰町の興文社の出版である。極めて几帳面な性格であったことはその作品を見ても分かるが、特に下図を見るとその丹念な、正確なデッサンがうかがわれるのである。女高師には明治三十一年まで勤め、その後、絵画の揮毫に専心しながら次々と展覧会に作品を発表した。中には昭憲皇太后のお買上げになった『孝養化隣』、また日本画で『夏景山水の図』『日光阿含瀑布の図』など南画風のものもある。明治三十五年、女子美術学校が創設されると、日本画の教授を委嘱せられ、四十二年には東洋高等女学校にも教鞭をとった。

父の仁左衛門は帛翁と号して、昔の武士気質の厳格な人であったが、明治二十五年、八十歳で没するまで、彼女はこの父に孝養を尽し、その犠牲となって一生独身で通した。もっとも絵画の道に進むためには独身でいることの方がやりよかったということも

写真上　『お茶の水風景』
次頁写真　『幼稚保育の図』

あろう。父の姉に当たる由子（又は玉江）という女性がいて、伊達家の奥に仕え、独身で終ったが、御殿を退いてからの晩年を彼女は引き取って、最後まで面倒をみたという。また、父の後妻のいね子は身分の低い出であったので、父はあくまでも召使いとして扱い、彼女に「お母さん」とは呼ばせなかったが、彼女はその人の晩年には自分から進んで「お母さん」と呼んで仕えたという。

彼女は絵画の材料を探すためもあってか、旅行が好きであった。『みちのくの旅日記』という明治三十年の紀行文が残っている。また和歌も多くつくり、そのほかピアノ、琴、謡曲なども好んでいた。明治九年から大正四年の亡くなる前までの日記が『窓のくれ竹』と題して残っている。大正四年六月八日、鎌倉の山荘で病のためにこの世を終った。享年六十四歳。彼女のあとを養子の忠氏が継いだが、忠氏にも子がなく、武村家は絶えたのである。お墓は本郷の吉祥寺にある。

以上のことは仁杉とよさんのご教示と遺著『耕霞集』から分かったので備忘のため記しておくことにする。